報告番号	香大医博乙　第 295 号

様式２１３

学位論文審査の結果の要旨

令和 3 年 2 月 12 日

審査委員	主　査	岡田宏基
	副主査	木下博之
	副主査	安田真之
申　請　者	鈴木　裕美	
論文題目	Behavior problems and dysfunctional parenting: Cross-sectional study in Japan	
学位論文の審査結果	合格 ・ 不合格　（該当するものを○で囲むこと。）	

〔 要 旨 〕

【背景】本邦では発達障害者支援法により、発達障害の早期発見、早期介入を推し進める政策が取られるようになった。そのため、発達障害に関する知識が広がり、それと共に問題行動を示す子どもは保育施設や教育機関で発達障害を疑われることが多くなった。この研究は、子どもの問題行動は発達障害以外の因子と有意に関連するのではないかという仮説を基にアンケート調査した。

【方法】香川県高松市の34保育所に通所する2～5歳児（3,515人）の保護者を対象に、自記式アンケートを2015年2～3月に実施した。アンケートでは保護者の年齢、婚姻状況、子どもの数、学歴、年収、就労時間の他、精神的健康度、子育てスタイル（敵意的、過剰反応、過剰な甘やかし）、発達障害の診断の有無、子どもの問題行動（Eyberg Child Behavior Inventory score: ECBIスコア）を調査した。

【結果】この研究に1,410人の母親が参加した。発達障害と診断されている子どもは7.8%であったが、ECBIで問題行動がカットオフ値を越している子どもは17%いた。交絡因子を調整すると、母親の悪い精神的健康度やすべての子育てスタイル（敵意的、過剰反応、過剰な甘やかし）、両親の関係性の悪さも子どもの問題行動と有意に関連があることが分かった。

【考察】子どもの問題行動は、母親の婚姻状況や世帯年収、学歴（社会経済的ハンデ）とは有意な相関が認められなかった。母親が無職であることは子どもの問題行動と関連があった。社会的繋がりのない子育てはストレスを生み、精神的健康度の悪化や不適切な子育てに繋がる可能性が示唆された。不適切な子育てスタイルが子どもの問題行動と有意な関連があり、夫婦仲の良い両親に育てられた子どもは、問題行動が少ないことがわかった。先行研究でも同様の結果があり、争いのない安定した家庭環境は子どもの攻撃的態度を予防し、心を穏やかに保つことができると考えられる。

【結論】子どもの問題行動は、夫婦関係や子育ての仕方と強い関連があり、そこに今後の介入すべきポイントがあると示唆された。

本研究に関する学位論文審査委員会は令和3年2月4日に行われた。本研究は子どもの問題行動に関して親の不適切な子育てが強く関連することを指摘したもので、結果に対する十分な考察もなされている。本研究で得られた成果は、子どもの問題行動を親への介入で軽減できる可能性を示唆した点で意義があり学術的価値が高い。委員会の合議により、本論文は博士（医学）の学位論文に十分値するものと判断した。

審査においては

1．対象を保育所や保護者の中でも母親に絞った理由
2．保育所を利用する保護者を対象としているのに、無職の人がいるのはなぜか
3．ECBIで扱う問題行動は年齢によって違うのではないか、2～5歳児に適応しにくかったところはあるか、他に問題行動を測定するスケールはあるか、なぜECBIを選んだのか
4．重回帰分析で調整する因子の選び方、調整因子は多い方が良いのか
5．今回の研究を通して子ども自身にできることは何かあるか
6．発達障害の定義、なぜ質問に発達障害の分類を聞いていないのか
7．親が発達障害だと子どももそうであることが多いが、親についての調査はしないのか
8．発達障害がある親を抽出して介入すれば効率的ではないか
9．親への介入はADHD児では有効だと思うが、ASDでは難しいのでは
10．夫婦関係についての考察は母親だけでなく、父親からの視点も入れる必要があるのでは
11，社会経済的因子にも注目した理由
12．社会経済的因子と子どもの問題行動について有意な関連がないという結果は他の研究ではどうか、関連があるならどの因子か
13．就業時間0の（保育所利用が可能な）特殊な事情が結果に影響していることは何か
14．回答率が施設によってばらつく理由
15．所得や学歴など回答しづらい項目について
16．アンケートはすべて日本語版を使用したのか
17．子どもの定期的な受診はあるかという質問項目の分析はしたのか
18．親の就労時間と精神的健康度の関係は見られなかったか
19．就労時間0の人の特徴は何か、社会との接点がないことと子育ての関係は何か
20．先天的な子どもの問題だと親への介入は有効でないこともあるのではないか

などについて多数の質問が行われた。申請者はいずれにも明確に応答し、医学博士の学位授与に値する十分な見識と能力を有することが認められた。

掲載誌名	Pediatrics International 第 61 巻, 第 11 号		
（公表予定）掲載年月	2019 年 7月	出版社（等）名	Wiley Publishing Japan